

皆さんお焼香をされました▶

▼ 法要の様子



第38号

発行所

浄土真宗本願寺派 本願寺神戸別院
〒650-0011
神戸市中央区下山手通八丁目一番一号
TEL 078-341-5949

モダン寺新聞

別院だより

平成24年度盂蘭盆会勤まる

時三十分より、本願寺神戸別院三階本堂において、盂蘭盆会（うらぼんえ）が勤まりました。なお、京都の西本願寺では毎年八月十四・十五日の二日間お勤まりになります。

淨土真宗では、「歓喜会（かんぎえ）」とも呼びます。

また、淨土真宗では、「亡くなられた先たちのご恩に対し、あらためて思ひを寄せるのがお盆です。」

〔拜読 淨土真宗のみ教え〕よりと、あるように亡き方をご縁として結ばれた尊い仏縁を喜び、そしてこの私もこの世の縁尽きた時、必ずお淨土で会わせていただく身であるということを、思はせていただくとても大切な法要であります。

盂蘭盆会の当日は、大変暑い日でしたが、別院本堂に用意された椅子席が足りなくなるほどの方々がお参りされました。法要は、午後一時半になると行事鐘が堂内に響き渡り、諸僧が入堂し、滝口隆誠輪番導師のもと、お勤めしました。また、「阿弥陀經」のお勤め中には参拝の方全員にお焼香をしていただきました。

法要に引き続き、当別院輪番による法話がございました。法話の中で輪番は、「お盆は日本独特の行事であり、始まりは江戸時代で、盆と正月くらいは田舎に帰つてお墓参りをしなさい。それが

今まで伝わったものであります。」と、お盆のいわれを述べました。

今から二千五百年前にお釈迦さまが説かれたお経さまが、いま私たちのもとへ届けられている。また、そのお法界に、いま会わさせて頂いている。これは大変素晴らしいことである。

私たちはこの世に生を受けると、老いてゆき、そして病気になつて、最後には死んでゆかなければならぬ。それが、お釈迦さまが説かれた「四苦」。

しかし、私たちは「死ぬのは他人であつて、私はまだ大丈夫」と思っている人が大半です。続けて、あるご門徒さんの話をあげ、その方は息子さんが若くして脳腫瘍に侵され、その息子さんは「僕は死んだらどこ行くの」と尋ねるとお母さんは「仏様の国へ行くのよ」と答え、すると息子さんは「なら、僕が先に行つたらお母さんも必ず来てくれるよね」と返し、お母さんも「必ず行くよ」とお答えになつたそうです。そして、息子さんはお淨土に生まれてゆかれました。お母さんはその約束を守るために多くのお説教を聞きに行かれ、この私の命も必ず終わっていくということに気づき、私が私の行く末を目覚めさせてくれたのは息子であつたとお念佛を申されたそうです。

そして、最後に私たちは「淨土」という帰るべき家があり、それは「こちらのふるさとです。」と、法話の最後を締めくくりました。

暁天講座



『朝粥』をいただきました

八月一日（水）～三日（金）の三日間別院において、暁天講座（ぎょうてんこうざ）が行われました。一日の講師は杉本照顕師・二日は池本史朗師・三日は本川英曉師よりご法話をいただきました。

当日は午前七時より本堂で正信偈のお勤め、引き続きご法話がございました。また、二日にはモダン寺土曜子ども会サマースクールに参加していた子ども達も眠たい目をこすりながら、大きな声でお勤めをしていました。

ご法話の後は会場を一階ホールに移し、別院仏婦の皆さんがあつた大きな声でお勤めをしておられたのでお腹が空いていたのか、お代わりをする人もおられました。



ノートは大切な思い出の詰まった宝物になつたと想います。

夕食のカレー作りは自分たちで具材は何がいいのか、

サマースクールが終わり、子ども達に感想を聞いてみると、「もう一日お寺に泊まりたい」「船は楽しかったけど、歩くのは疲れた」などと子どもらしい感想を口にしていました。

一泊二日という短い時間ではありましたが子ども達にとっては貴重な経験を行いました。自分たちで考え、作つたカレーはとても大変だった分、美味しくて、また普段自分が食べさせてもひしと感じることが出来ました。

そして、このサマースクールでお寺

どのような味付けがいいのか等を考え買い出しや調理のほとんどを子ども達で行いました。自分たちで考え、作つたカレーはとても大変だった分、美味しくて、また普段自分が食べさせてもひしと感じることが出来ました。

先生の力強く、また語りかけるようなご法話に参拝者の皆さんはたいへん喜ばれておられました。

サマースクール

夏休みという事もあり、八月一日・二日と『モダン寺子ども会サマースクール（お泊り会）』を致しました。初日は友達ノート作り、カレー作りと花火をしました。

友達ノート作りは大きな台紙に自分の似顔絵や好きなことなどのプロフィールを書き、皆の台紙を印刷・製本するという体験学習でした。自分が書いた文字や絵が印刷され、一つの本となるところまで自分達の手で作つた

アーチに行きました。船から見る景色は普段目にする風景と違つて見えてとてもワクワクして船を降りてからは清盛の旧跡を巡ることで、身近な場所に多くの歴史とロマンが沢山あることを学びました。



歴史クルーズ・ウォークに出発!!



講師の高崎師

常例法座

七月の常例法座は、高崎正英師（神崎組・淨光寺）を講師にお迎えしてのご法座でした。

当日は、夏の猛暑にもかかわらず、一時半からのご法座に皆さん足を運ばれました。

高崎師はご法話の中で、「如来さまのお慈悲に出会うものに男であつたり、女であつたり、若いか年を取つてゐる」という事は全く関係ない」と話され、

私たちはみんな如来さまの限りないお慈悲に包まれていて、誰一人もらさずお救いにあずかる身であることを力強く語られました。

先生の力強く、また語りかけるようなご法話に参拝者の皆さんはたいへん喜ばれておられました。

第一土曜仏教講座



石川師の自坊のあった場所

七月の第一土曜仏教講座のご講師は（株）金剛組・石川了佑師をお迎えいたしました。先生は東日本大震災の起きた東北・宮城県東松島の出身で、実家は天台宗の寺院です。講座では地震の起きた当時の様子を中心にお話になりました。

震災の起きた当时、先生は比叡山で修行をしておられました。その修行中にあの大震災が起きました。

先生は震災の起きた時は信者の方と食事をしておられたらしく、その食事中に師匠から呼び出され地震の事を知られました。そして、テレビで津波の映像を見た瞬間、実家の事が頭を過ぎりました。電話は全く繋がらず、一週間はそのような状態が続き、ようやく電話が繋がり現地へ足を踏み入れ現状を見た瞬間、「ここは地獄なのか」と思

うくらいの光景だつたそうです。
そして、自坊のある地区へ行つてみると、「自坊は跡形もなく流されていて、そんな様子をみて言いようのない虚しさを感じました。」と言葉を詰まらせながら話されました。
そんな中、仮設住宅へ足を運びボランティアをしようとしても最初はなかなか受け入れてもららず、毎日足を運ぶことで少しずつ皆さんも受け入れてくださり、心と心のつながりを一番に考えボランティアを続けられたそうです。

先生は、今も宮城に帰られた際は、必ず仮設住宅へ行かれるそうです。すると、みなさん「ありがとうございます」と声をかけてくださるそうで、そこには人とひとの本当の心のつながりがあるように感じました。

講座の最後には、「3・11という困難に直面し、また自分自身が心の苦しみや辛さを体験して今の自分があります。」また、「人間というのは辛いことを乗り越え、生きていく動物であり、信じるものがないと生きていけない動物です。」と話されました。そして、「今もまだ支援を望んでいる方もたくさんおられるのでこれからも支援をお願い致します。」と述べられました。

今回の講座を聞かせていただき、自分が今何をすべきなのか、何ができるのかという事を深く考えさせられた。そこで、念仏は仏（阿弥陀如来）を念ずること。成仏とは仏に成ること。しかし、

永代経法要

去る六月二十四日（日）神戸別院において、平成二十四年度永代経法要が勤まりました。当日は梅雨入りしたのが嘘のように快晴にも恵まれ多くの参拝者がお参りになりました。
永代経法要は、亡き方のご命日をご縁として聞法の機会を得て、お念佛の尊い教えをこの私に伝えてくださった有縁の方々のご遺徳を偲び、私自身が聞法に励み、そのみ教えを今度は子や孫に伝えていくことが『永代経』の意味するところです。

法要当日は、十二時三十分より本堂において、『無量寿經作法』を参拝者の皆さんと一緒に勤めました。お勤め中にお参りになられた参拝者の皆さんに順番にお焼香をして頂きました。

お勤めが終わると、滝口隆誠輪番が挨拶を述べました。輪番の挨拶に引続き、ご講師の竹内俊之師（揖龍東組淨蓮寺）のご法話となりました。

竹内師は、ご法話の中での「七五〇年前に親鸞聖人がこの道を進みなさいとお示しになられた。この道とは念佛（浄土真宗）の道である。」と、聖人が示された私たちの歩むべき道を強調されました。また、浄土真宗の教えを親鸞聖人は『念佛成仏是真宗』と明確に一言

修行をして仏になるのではなく、念佛して仏になるのです。

ですが、現代人は仏に成るということすら何かが分からなくなつてきてします。今は、お淨土どころか、「人間死んだら焼かれて終わり、それが証拠に死んで戻ってきたものはいない。」と、おっしゃる方がおられます。

しかし、淨土真宗の教えは「念佛に会つた者は、この救いようのない私を必ず淨土に生まれさせるという教えであり、それこそお念佛の慈悲であつて念佛道なのです。」と話されました。

また、「淨土真宗は『死なない宗教』です。念佛申す者は死ぬ人生を歩んでいるのではなく、淨土に生まれる人生を歩んでいるのです。」と、法話の最後を締めくくられました。

今回のご法座で、改めてお念佛の尊さを感じさせていただきました。



力強く話された竹内師

チャリティーコンサート

七月七日（土）別院一階ホールにて『東日本大震災チャリティーコンサート』が行われました。

当日券も発売され、午後三時の開場と同時に続々とお客さんが来場され、一階ホールに用意された二三〇の座席が満席になるほどでした。

なお、このチャリティーコンサートでの収益金は全額寄付されました。



雅樂による演奏

構成され、第一部は雅樂による演奏が行われ、雅樂の音色がホールに響き渡るところと、とてても幻想的な雰囲気に会場全体が包まれました。

第二部ではこのために結成された声楽アンサンブル『Luxe』（リュクス）が優雅な音楽とその透き通るような美声を披露されました。『Luxe』とは、フランス語で『贅沢な』『優雅な』という意

味でその言葉の示す通り、会場はとても優雅な空間に包まれ、時間の経つのも忘れて聞き入つておられました。

一部・二部とは全く違った雰囲気となりました。

また、サンドウイッヂマン直筆の色紙が貰えるじゃんけん大会も行われ、皆さん右手を大きく挙げ、数に限りのある色紙を求めて白熱した戦いが繰り広げられました。



『Luxe』によるステージ

第三部は、このチャリティーコンサートのスペシャルゲストであるお笑いコンビ『サンドウイッヂマン』の伊



『サンドウイッヂマン』のお二人

後のインタビューの中でサンドウイッヂマンのお二人は、「被災地のボランティアに来られる方で神戸の人はとても多く、同じ震災を経験した人が来られるのはとても心強い」とも話され、感謝の言葉を口にされました。



当日販売された『ほたてあかり』

また、当日は滋賀県立大学の学生による復興支援商品である、宮城県田の浦のホタテを使った『ほたてあかり』も販売され、用意した全てが売り切れほどの人気でした。

なお、売上金は全額被災地へ寄付されます。

常例法座

第一土曜仏教講座

十月

◇講

師 ◇氷上西組

西光寺

中 尾 敬 雄 師

常例法座

別院仏婦定例法座

九月

七日（金）午後一時半より

◇講

師 ◇赤穂北組

浄蓮寺

増 井 淨 見 師

十五日（土）・十六日（日）

両日ともに午後一時半より

◇講

師 ◇阪神南組

淨元寺

寺 本 峰 昭 師